

私の所属するお寺には一本の桜の木が立っており、四月になりますと満開の花を咲かせます。今年は気候や雨の為、短い間でしたが沢山の花が咲かせました。ご法事で来られたご門徒さんが「この時期は毎年楽しみにしていたけれど今年はもう散ってしまうて残念ね」と言われ「そうですね」と共に桜の花の儂さに寂しさを感じました。

私たち日本人にとって桜とは長い冬が終わわり、四月から始まる新たなスタートを感じさせます。また桜は短い間に一所懸命、花を咲かせ散っていく様子から、

散る桜 残る桜も 散る桜

という良寛和尚の和歌が残されています。どんなに美しく咲く桜でもいつかは必ず散ってしまうという意味になります。

親鸞聖人が九歳のとき、僧侶になるため得度を受けに青蓮院の慈円和尚のもとを訪れました。しかしすでに夜は更け、得度には時間もかかりました、たくさんのお弟子を集めなければなりません。「もう遅いから明日にしよう」といった慈円和尚に、親鸞聖人は次のような和歌を詠んで答えたといわれています。

明日ありと思ふ心のあだ桜 世半に嵐の吹かぬものは

「この世は無常であり、今を盛りと咲く桜が夜中の嵐で散ってしまうかも知れません。同じように、私の命もいつなくなってしまうかわかりません。どうか、今ここで得度の儀式を執り行って下さい」という親鸞聖人のそのことばに心打たれ、慈円和尚はすぐに得度の手配をされたということです。

親鸞聖人は明日どうなるかわからない我が身だからこそ、今すぐ得度の式をしてほしいと伝えられたのです。私たちは寝て起きれば明日があると思っはいいないでしょうか。私たちのいのちは桜の花のように満開の花を咲かせ、いつかは散ってしまいます。桜はさまざまなことを先延ばしにしまいがちな私たちに「今」の大切さを教えてくれます。

